

TOPIC-1

「モジュールコース」による多角的な学び

II-BEATの特色あるプログラムの一つである「モジュールコース」は、相互に関連した3つの科目を同タームに開講することで、そのテーマについての多様な角度からの学びを促そうというものです。具体的には、当該のテーマに関する基礎的な知識を身につける「科目A」、週2回開講でテーマについてより深く学ぶ「科目B」、それらをもとに自らがイシューを探索する「科目C」の3科目からなります。このうち科目Bは、それ自身が週2コマ開講して実施されるインテンシブ科目であり、実地体験や実習など体験型の学びの機会を含んでいます。

今号では、「スポーツ振興研究」および「移民・難民論研究」のモジュールコースにおける科目Bの授業の中で開催された、イベントやワークショップについて紹介します。

スポーツによるまちづくり

昨年度より新たに設けられたモジュールコース「スポーツ振興研究」の科目Bとして

開講している「スポーツによるまちづくり」が、谷藤千香准教授と小泉佳右准教授により行われました。この授業は「地域コミュニティの問題解決や活性化」など、スポーツが「まちづくり」に果たす役割に関する理解を深めることを目指しており、実地体験として、地域で開催されるスポーツイベントにスタッフとして参加する活動も含まれています。

今年度の実地体験として、「ちばスポーツ夢フェスタ」が、10月14日（祝日）に千葉県総合スポーツセンター野球場で開催されました。このイベントは、同センターの指定管理者である千葉県スポーツ協会・まちづくり公社グループが主催し、小学生以下の子どもおよびその保護者を対象に、多様なスポーツに触れる機会を創出し、運動のきっかけ作りとしてスポーツの日に実施されているものです。

今年度は、野球場で開催されたこともあり、ベースランニングやキャッチボール体験など野球競技にかかわるブースが開かれたとともに、モルックというフィンランド発祥のニュースポーツや、ベーゴマなどの昔遊びコーナー

も用意されました。受講生達は、参加者の受付や各ブースを担当するなどして、イベント運営に協力しました。

イベント参加を経て、受講生達から次のような感想が上がりました。

「イベントにおいては事前の準備がとても大切で、来場者の動線を考えたり、トラブルやその対応を考えることが重要だと学びました。また、自分たちが楽しむことで、参加者にもその楽しさが伝わり、イベントの魅力を上げることができることを学びました。」「小さな子どもたちが競技を理解しやすいように、柔軟にルール変更を加えるなど、現場で工夫や調整をしていく必要性がわかりました。」「スポーツイベントが地域の繋がりを生み、世代間交流を促進するような作用があると実感しました。」「今後は、参加者の集客方法や、全世代が楽しめる企画に関する問題を解決することが課題だと感じました。」

この実地学習は、学生たちの学びを体験的に深め、地域におけるスポーツの新たな可能性を見出す機会となりました。



フィールドから学ぶ

モジュールコース「移民・難民論研究」の科目Bには、佐々木綾子准教授と福田友子准教授が担当する2コマ連続開講の授業「フィールドから学ぶ」が位置づけられています。この授業は、座学、演習、実習などを組み合わせて学ぶことで、日本に暮らす移民、難民、外国にルーツを持つ人々を取り巻く状況について理解するとともに、「対象」とされる人々との協同する活動を通して、学術的知識と経験知・実践知とを結びつけたかたちで修得することを目指しています。

授業の中では、講義のほかに、ゲストスピーカーによる講演、さらには、高校進学をめざす外国につながる子どもたちに対して日本語の習得を中心とした学びの支援を行っている「NPO法人多文化フリースクールちば」への訪問見学なども経験します。それらの後に、外国につながる子どもたちとの交流を含んだ実習が位置づけられています。これまでは国立歴史民俗博物館へのツアーが行われていましたが、今年度は縣拓充特任講師とChiba Media Art Projectが展開する「ななめ大学」プロジェクトとの連携によるワークショップ、「オノマトペで音頭をつくろう」が、11月

10日（日）に開催されました。このワークショップには、多文化フリースクールちばに通うアフガニスタンや中国出身の子どもなど、計9名が参加しました。

ワークショップのゲストは、音楽作家の宮内優里さん、シンガーソングライターで絵本作家でもある小島ケイタニーラブさんによるユニットである「ONDO」のお二人です。お二人は、老若男女誰もが肩の力を抜いて親しめる「音頭」というフォーマットを用いて、これまで四街道のお祭りや小学校の中で、市民や子どもと一緒に楽曲を制作するプロジェクトを行ってきました。今回は、外国につな



がる子どもたちの母語にある「オノマトペ」を歌詞に取り入れた音頭を作ることが行われました。

ワークショップ当日は、まず大学生主導で、「ジェスチャーしりとり」を用いたアイスブレイクの活動が行われました。それにより、ある程度参加者同士の緊張や関係性が和らぐと、まずは宮内さん主導で、作曲が行われました。宮内さんが普段用いているコンピュータや機材を用い、子どもたちも打楽器等で録音に参加しつつ、短時間で音を重ねて曲を作り上げていきます。その過程は、なかなか目にする事のない、プロによる作曲のプロセ

スを認識する機会にもなりました。

その後、受講生と子どもたちがグループになって西千葉キャンパス内を散策しながら、秋にまつわるオノマトペを探す活動が実施されました。大学生たちは、秋を感じる風景を見つけると、子どもたちに「それを中国語やダリー語でどのように表現するのか」を尋ねる場面が多々見られました。

その後、「ティックティック」「ファラファラ」など、収集したオノマトペを全体で共有しましたが、そこでは言語・文化によるオノマトペの違いと、その面白さが実感できました。続いて、それらのオノマトペを取り入れ

ながら、小島さん主導で歌詞の制作が行われました。その間、大学生と子どもたちは、どんぐりや木の葉など、秋の場面を表現するような振り付けと一緒に検討しました。最後に、小島さんが歌い、参加者が振り付けを踊りながら、全員で出来上がった楽曲「多文化どんぐり音頭」を演奏・鑑賞しました。

今回のプロジェクトは、「オノマトペ」という切り口から、外国につながる子どもたちの眼差しを認識するとともに、異なる文化的背景・言語を持つ人とのコミュニケーションについて体験的に学ぶ貴重な機会になったようです。

TOPIC-2

自身のイシューベースの学びを振り返るための「メジャープロジェクトループリック」を運用開始!

今年度より、4年間の学習成果を可視化し、各学生にメジャープロジェクト（卒業研究・卒業制作）の現在地を意識してもらうことを目的とした、「メジャープロジェクトループリック（MPループリック）」の運用が始まりました。

国際教養学部では、3年生になりメジャー所属をすると、メジャープロジェクトの完成をめざした探究が本格的にスタートします。国際教養学部では、4年間の学修成果の目標となる「ディプロマ・ポリシー（DP）」として、左に示す5つの観点を定めています。また関連して、メジャープロジェクトを中心としたイシューベースの活動に関して、「涵養する能力のイメージ」というものを定義しています。

メジャープロジェクトはいろいろな段階を踏みながら進んでいきますが、メジャープロジェクトの進行状況を確認するとともに、DPや涵

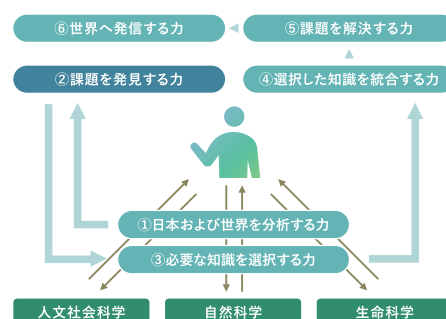
養する能力の達成度を定期的に自己点検してもらうために、MPループリックは開発されました。具体的には、3-4年生にかけて5回MPループリックに回答してもらうことで、自らの学びやメジャープロジェクトの振り返りや計画の見直しなどに役立ててもらえます。

MPループリックの設問は13項目あり、それぞれ「1. 達成できていない」～「4. 十分に達成できた」の4段階で自己評価します。なお、最終的に全てが3あるいは4になることが一番の目的ではありません。「広く越境する学びにつなげること」を重点的に意識しても良いし、「専門的な方法を使って深く学ぶこと」を優先しても構いません。研究分野も多様であるため、人によって重視することは違ってよく、各自の研究テーマに基づいて、伸ばすべき能力は何かを意識してもらいたいと思います。

国際教養学部ディプロマ・ポリシー（DP）

1. 自由・自立の精神
2. 地球規模的な視点からの社会とのかかわりあい
3. 普遍的な教養
4. 専門的な知識・技術・技能
5. 高い問題解決能力

涵養する能力のイメージ



メジャープロジェクトループリック

設問	ディプロマ・ポリシー（DP）との関係	涵養する能力のイメージとの関係
1 自らの興味関心に基づいた社会課題（イシュー）を調べ、広く探索できた。	1.自由・自立の精神 3.普遍的な教養	①日本及び世界を分析する力
2 自らの興味関心に基づいた課題の発見や探究のために必要な学問領域を把握することができた。	3.普遍的な教養 4.専門的な知識・技術・技能	①日本及び世界を分析する力
3 一つの領域や専門分野にとらわれず、イシューベースの（社会課題に基づいた）課題設定ができた	2.地球規模的な視点からの社会とのかかわりあい 5.高い問題解決能力	②課題を発見する力
4 既存の学問領域の知見と対比させながら、自らのメジャープロジェクトの位置づけと新規性を説明できた。	2.地球規模的な視点からの社会とのかかわりあい 5.高い問題解決能力	②課題を発見する力
5 データや資料（試料）を収集・抽出するための知識や技能を獲得できた（文献調査、アンケート、インタビュー、実験、フィールドワーク、など）。	3.普遍的な教養 4.専門的な知識・技術・技能	③必要な知識を選択する力
6 収集したデータや資料（試料）を分析するための知識や技能を獲得できた（質的・量的な分析方法、統計的分析方法、など）。	3.普遍的な教養 4.専門的な知識・技術・技能	③必要な知識を選択する力
7 自らのメジャープロジェクトの課題解決にふさわしい学問領域や必要な方法論を選択できた。	3.普遍的な教養 4.専門的な知識・技術・技能	③必要な知識を選択する力
8 自らのメジャープロジェクトの課題解決のために、さまざまな領域の知識を柔軟に組み合わせたり、学際的に統合したりできた。	4.専門的な知識・技術・技能 5.高い問題解決能力	④選択した知識を統合する力
9 自らの力で課題を探究できた。	1.自由・自立の精神 5.高い問題解決能力	⑤課題を解決する力
10 設定した課題に対して有益な解決方法を提案できた。	4.専門的な知識・技術・技能 5.高い問題解決能力	⑤課題を解決する力
11 自らのメジャープロジェクトの中で、新しい視点を提示したり、新たな価値を創造したりできた。	4.専門的な知識・技術・技能 5.高い問題解決能力	④選択した知識を統合する力 ⑤課題を解決する力
12 自らのメジャープロジェクトの成果や魅力を伝えるために、効果的なプレゼンテーションにまとめることができた。	2.地球規模的な視点からの社会とのかかわりあい 5.高い問題解決能力	⑥世界へ発信する力
13 メジャープロジェクトの成果を社会に発信することができた。	2.地球規模的な視点からの社会とのかかわりあい 5.高い問題解決能力	⑥世界へ発信する力

TOPIC-3

知識集約型社会を支える人材育成事業・共通テーマ2参加校合同主催 「文理融合教育における課題設定のあり方」最終報告会 開催!

令和6年12月5日(木)に、文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)」共通テーマ2参加校(千葉大学、新潟大学、名古屋商科大学、金沢大学)合同主催で、標記最終報告会をオンライン開催いたしました。本事業では、採択メニューⅠ・Ⅱ・Ⅲを横断して4つの共通テーマが設定され、汎用性ある成果を蓄積・発信することを目指しています。このうち共通テーマ2では、「文理融合教育における課題テーマやイシュー設定のあり方を情報交換・検討」をテーマに掲げ、本報告会はその成果を集約する機会としております。

はじめに、開催にあたり、本学の小澤弘明理事(国際・教育担当)より開会挨拶が行われました。その中で、知識基盤社会における人材育成と「総合知」のあり方について検討する必要性が述べられ、今回の議論が従来の「文系」「理系」という考え方の再検討に繋がるのではないかと期待が示されました。

司会である縣拓充特任講師(大学院国際学術研究院)から本会の方針や開催の経緯が示

された後、【イシュー設定のあり方を整理する】として、和田健教授(大学院国際学術研究院院長/国際教養学部長)から「文理融合教育」という概念を再検討し、カリキュラムに学問分野の越境と多角的視点を反映させる議論が必要だとする問題提起がありました。続いて、小泉佳右准教授(大学院国際学術研究院/全学教育センター 副センター長)から、学生によって異なるイシュー設定について、「実践知」「言語知」という観点から車の駆動形式になぞらえたモデル図の紹介がなされました。また、【各大学のプログラムの位置づけ】として、縣特任講師から、共通テーマ2参加校の取組みについて複数観点からの位置づけを試みたマトリクスやスケール図が示され、これまで各校を巡回訪問した成果が公表されました。

休憩をはさんだ後、新潟大学から福島治副学長(学務担当、教育基盤機構 教学マネジメント部門長)、齋藤有吾准教授(教育基盤機構 教学マネジメント部門)、名古屋商科大学から亀倉正彦教授(商学部)、金沢大学から林透教



本学が提案した、イシュー設定の違いを車の駆動形式になぞらえたモデル図

授(教学マネジメントセンター 副センター長)山下貴弘特任助教(教学マネジメントセンター)をお迎えし、本学和田教授のモデレートによる【ディスカッション】が行われました。前半に本学が示したイシュー設定のモデル図や各大学の位置づけを基にして、相互の認識を確認し、理解を深める議論が交わされました。また、学生がイシューを発見することと各事業での取り組みとの関連や、トランスディシプリナリな学びに対する意識を確認する場面もありました。

最後に、小澤弘明理事から閉会挨拶があり、本会は無事閉会となりました。

共通テーマ2参加校合同主催「文理融合教育における課題設定のあり方」最終報告会

- プログラム
 - ・開会挨拶
 - ・イシュー設定のあり方を整理する
 - ・各大学のプログラムの位置づけ
 - ・ディスカッション
 - ・閉会挨拶
- 参加者

- 千葉大学 …… 小澤 弘明(千葉大学 理事(教育・国際担当))
和田 健(千葉大学 大学院国際学術研究院 研究院長・教授/国際教養学部長)
小泉 佳右(千葉大学 大学院国際学術研究院 准教授/全学教育センター 副センター長)
縣 拓充(千葉大学 大学院国際学術研究院 特任講師)
- 新潟大学 …… 福島 治(新潟大学 副学長(学務担当)/教育基盤機構 教学マネジメント部門長)
齋藤 有吾(新潟大学 教育基盤機構 教学マネジメント部門 准教授)
- 名古屋商科大学 …… 亀倉 正彦(名古屋商科大学 商学部 教授)
- 金沢大学 …… 林 透(金沢大学 教学マネジメントセンター 副センター長/教授)
山下 貴弘(金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教)

